



建築・環境計画における場所性の形成に関する研究

李, 暎一

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

1992-03-31

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲1121

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1001121>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・(国籍)	李 暎 一 (大韓民国)
博士の専攻分野の名称	博士 (学術)
学位記番号	博い第205号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与の日付	平成4年3月31日
学位論文題目	建設・環境計画における場所性の形成に関する研究

審査委員	主査 教授 早 川 和 男
	教授 多 淵 敏 樹 教授 金 谷 弘

論 文 内 容 の 要 旨

近年主義に基づく建設・都市計画にとって代わる新たなパラダイムとして、近年「場所」の概念が注目されてきている。この「場所」に対する関心は人間と環境との均衡が崩れていることを意味するにほかならない。これは二つの主な傾向にみられる。ひとつは、近代の建築、都市計画の機能的な整合性や技術的な生産の効率性と関連した“空間”に関わるものである。この抽象的かつ画一的な空間の普遍的適合が重んじられた結果、〈場所の喪失—LOSS OF PLACE〉がもたらされた。もうひとつは、商業主義による見掛けだけの地域的ないしは伝統的外観をもつ建築の蔓延がもたらす〈非場所—PLACELESSNESS〉である。この誤った地域主義まがいの建築は場所の創造を麻痺させ、地域を変化のない閉鎖的なものになっている。

このような〈場所の喪失〉と〈非場所〉の問題は、韓国においても近代化の過程のなかでみられる著しい現象である。本研究はこのような問題意識に基づいて場所の形成とその文脈に着目し、場所の創造について考察することによって新たな建築・環境計画の基礎的知見を得ようとするものである。

本論考において中心となる概念は「コミュニティ」、「共同空間」、「場所」、「文脈」である。これらの仮説に基づいて“場所の形成”を意味と形式の相互関係から次のように仮説的に設定した。

空間は主体の置かれた状況に対応して行われる行為によって意味を帯びる。

この意味は主体の相互関係のあり方によって形式と関連しており、互いに喚起される。すなわち、形式は意味によって呼び起こされ、意味は形式によって評価され、価値を有する。これらの関係は空間文脈に濾過され、場所は形成され则认为る。本研究では、このような視点から伝統的集落空間と建築作品を対象に場所の形成を明らかにしており、そのプロセスから場所の創造について考察してい

る。

論文は、場所の概念・形成・創造の順になっており、全体は5章で構成されている。

第1章では、場所の概念について総合的に捉え、研究の目的に視点・方法について述べている。また、本論文と関連した従来の研究の考察から本論文の位置付けを明らかにしている。

第2章では、韓国の伝統的集落、またこれと深く関連した伝統的共同空間である茅亭を対象としてその配置がもっている生活行為の内容との関わり方と、これらによる視覚的效果・演出としての景観について考察し、場所の形成を「意味」と「形式」から明らかにした。これら配置、生活行為そして視覚的特性としての景観との間にみられる相互関係によって場所の特性はあらわになり、人々に場所として理解されるのである。その内容を以下にまとめる。

- ① 配 置—生活行為：場所を秩序づけ、価値を与える。
- ② 景 観—配置：場所を視覚的に特徴づけ、可視化する。
- ③ 生活行為—景観：風景の中に住みつくことは一つの場所を限定する。これは場所との間に調節的な関係を取り結ぶ。

第3章では、新・旧の豊かなコミュニティ空間が存在している滋賀県横山集落を対象に「主体」、「行為」、「空間」の3つの要素の相互関係を形式と意味から把握し、場所の形成について考察した。この時、「主体」と「空間」を介存する「行為」は本質的に時間的性格を帯びる。このような行為の周期性を任意的行為、短周期的特定行為、長周期的特定行為、非日常的特定行為の4つのタイプに分類した。

このように周期的に行われる4つの周期的行為をベースとして、場所の形成を「行為」・「主体」・「空間」という3つの要素の関係から把握した。その結果、これらはそれぞれ重層的な構造をもっていると同時に、相互作用によって意味が充実することがわかった。これらが「場所」の形成においてもつ意味を以下にまとめる。

- 1) 行為の重層性—「場所」の意味を発生させ、それらを強化し、「場所」を象徴化する。
- 2) 主体の重層性—個別目的に対する集団が、重層的に連帯することによって、「共同」の概念を傳達・継承し、「場所」の意味を伝達・維持・発展させる。
- 3) 空間の重層性—広がり様々な使われ方の重層性に対応しており、拠点的空間と流動的空間、また固定的しつらえと一時的しつらえを組み合わせた複合性を有する。これらによって「場所」の意味を単位化＝統一化(Unify)する。

主体の自主的な働きかけによって行為の内容は豊富化し、空間は内的秩序を保つ場所としての意味を色濃く帯びている。これら3者の関係による場所形成の法則性は、物理的形態の秩序に主眼をおいた近代建築の概念になかったものである。

第4章では、近代合理主義にとって代わる新たなパラダイムの模索について以下の3点に注目して試みた。第一に、建築の複雑性と多様性に着目し、まずその背景について概観した。第二に、都市形態において広場の持つ不規則さや生活の場としてもつ意味などについて考察した。第三には反均質的空間の特性がみられる建築群計画の作品をピック・アップし、それぞれの作品にみられる建築の特性

について考察した。付加されることを拒み、排除して得られる純粹美学によって首尾一貫したモダニズムは、その時代精神と一致し、ある程度の成果を収めるが、新しい価値観による否定的な点もあらわにされるようになる。特に、ヴェンチュエリの「建築の多様性と対立性」を境にしてその批判は頂点に達し、建築の新的パラダイムを求め、様々な試みが現れる。本章では、6人の建築家の作品を通じて、排除して得られるクリアな理論ではなく、包含し多様な意味で開かれた多様性や曖昧性に注目した。なぜならば、人間の生活は主体やその状況に従って多彩なものであり、これと関わりをもつ空間は生活と関連して複雑であるばかりでなく、同一の空間でも個人の解釈によってなおさら複雑に変様するからである。このような複雑性に応える新しいパラダイムは、もっと多様で柔軟な論理構造を要求している。それは対象にとった建築作品にも見られるが対立し合う2つの概念を同時に包容できる能力を有し、新しい形式の調和を実現することである。全体の作品にみられる傾向について以下の3点の結果を得た。①カオス状態と秩序との間にバランスを取る散逸構造的形態、②個と全体の関係において一つ一つは独立しているがそれぞれの空間単位は互いに最善の位置で結合し合う自己組織的形態、③自然界にみられる制御されたカオスと非秩序が内在するフラクタル形態を挙げることができる。しかし、これらの形態は主体の参加や建築の空間文脈による固有性によって調節・変形された結果であり、意味と相互に喚起し合って成立する。

つまり、参加は主体相互の生活パターンを理解し合って形態の連続を創り出しており、空間文脈はその敷地に最も適切な解として固有の形態の創造を可能にする。また、形態は主体の空間体験と関連して秩序づけられる意味によって呼び起こされ、意味は形態によって評価され、価値をもつ。

第5章では、場所の形成を第2章から第4章の事例から意味と形式によって総括的に捉えた。その結果、形式においては、閉合性・中心性・近接性の3つのパターンを導き出した。閉合性（ENCLOSURE）は囲い込むことであり、それによって得られる空間の性格が場所を感じさせる。中心性（CENTRALIZATION）は閉合性と対を成すものであるが方向づけにより空間を構造化し、さらに周囲の空間を引き寄せる働きをする。また、近接性（PROXIMITY）は諸要素（エレメント）の集合による形態が場所を形成することを意味する。この近接性には主体の関わり方（関与）との関係から物理的な集合の形態と、主体の恣意性によって選ばれた集合の形態の二つが考えられる。

一方、「意味」による場所の形成は場所の“意味的内容”が問題となるが、〈出来事〉・〈規範〉・〈象徴〉・〈記憶〉があげられる。このような意味と形式による場所の形式へのプロセスを読み取り、新しい場所の創造を考える時、既存の文脈と調和をなす〈重層〉と新たなコンテキストの形成を刺激する〈浸透〉という2つの概念が同時に存在する。これらの相関関係は、すでに浸透した、あるいはこの瞬間浸透しつつあるすべての意味が次から次へと積み重ねられて一つの層（LAYER）をつくる。この層は新しい意味が浸透する下地を形成し、その新しい意味が全体を変化させる。古くなった意味が下地となり、新しい意味が加わるという弁証法的変様のプロセスによって過去と未来を結ぶ連続したシステムが出来上がり、意味を深さのあるものとする。このような意味の浸透による層が重なり合った構造（STRATIFIED STRUCTURE）となった時、その複合的意味は透明な重層（TRANSPARENCY）によって明白な意味を持つ。これらの重層と浸透は象形的かつ概念的な性質をもって現

れる。本章では、場所の創造を可能なものとするこれらの重層と浸透についてそれぞれ4つの特性を導き出した。まず、重層には、連続性・包摂性・応答性・記憶性があげられ、浸透には異化作用・再解釈・再認識・変形があげられる。建築および環境計画は単なる形態の操作でなく、このような特徴を持つ重層と浸透の弁証法的関係によって成立する場所の創造である。

論文審査の結果の要旨

近代主義の建築学や都市計画によって形成されてきた現代の地域空間は多く均質化し、その空間の固有の特徴を欠いている。従前の理論においては、建築や環境はまず、「空間」として扱われ、国際的に普遍的な概念で説明され、次に「地方性」という概念や、「地域性」という概念で補われてきた。

だが、個々の「場所」のもつ固有の性格が考えられるようになったのはごく近年のことである。一般にいう、ポストモダニズムはこの均質性から脱出するための意匠・装飾の復権という試みを行うものを含んでいるが、これらの理論を操作的な方法を説明するものにすぎない。

本論文は前掲の「場所」及び「場所性」、「場所の形成」、「場所の意味」という問題に対して現実の生活環境のフィールド・ワークと建築表現の検証を通じて解明・実証しようという目的を有している。

序論では建築学、生活学、美学、文学、哲学の知見を学際的に総合し、場所性の形成について論じている。生活行為と主体の態様（個人性と共同性）との関係及びこれらと空間との関わりを論じ、これらが意味及び形式を相互に喚起し、空間文脈を媒介して、場所性が形成されるという仮説を構築している。

これらを論証する方法として、①伝統的集落と共同空間におけるフィールドワーク、②建築空間におけるパラダイムの転換の検証、という二つの作業を行っている。

第一部では、韓国の南西部に顕著な集落空間を、その立地特性及び茅亭と称ばれる共同空間に着目して場所性の形成について分析している。この作業から集落立地と伝統的風水説との関係を明らかにした。また、これらの集落立地と茅亭及び付随する共同空間が、生活行為及びその共同性と深く結びついて独特な景観を形作り、場所の意味を形成することを実証している。

滋賀県の横山集落においては集落の共同空間及びその利用を悉皆的に調査し、従来の一部の建築計画学における地域施設の研究に欠落していた視点を指摘し、生活行為の重層性、主体の重層性、空間の重層性という場所の形成に関する構造を抽出している。

第二部においては、一定のコミュニティの中心をなす、またはコミュニティそのものを形成する建築群計画の事例をとりあげ、これらが好ましい生活環境として成功している背景にある、一定の形式を指摘している。即ち、その一見散逸の形態の中にある共通の法則性と概念群（パラダイム）を抽出している。

結論の「場所の創造」では、場所の形成は「形式」と「意味」の両面から捉える必要があることを論証し、これらを計画された事例と計画的意図をもたず自然に形成された事例を含めて普遍的概念と

して提起している。「形式」には、「閉合性」，「中心性」，「近接性」等の類型があることが事例を通じ論証されている。また，「意味」による場所の形成としては，「出来事」による形成，「規範」による形成，「象徴」による形成，「記憶」による形成に類型整理され，実証されている。

これらの「形式」と「意味」による場所性の形成は，既存の空間文脈に「重層される」ことにより，また既存の空間文脈を刺激し浸透させることにより，創造されることを明らかにした。

これらの研究成果は，環境科学，とりわけ建築デザイン，環境計画の発展に寄与するものであり，学術上高く評価されることから，博士（学術）論文として価値ある研究であると認める。

よって，学位申請者 李 暎一は，博士（学術）の学位を得る資格があると認める。